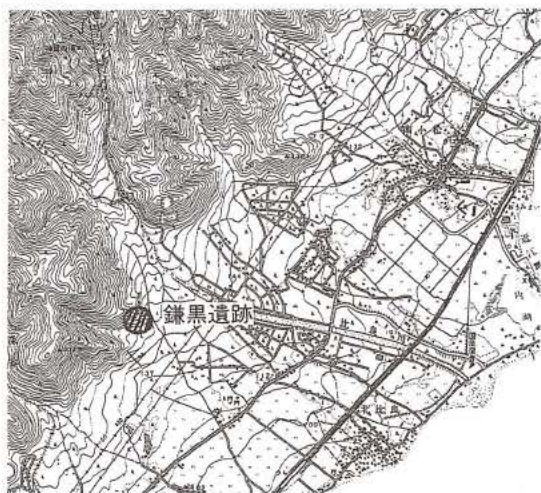


## 264. 志賀町鎌黒遺跡採集の須恵器

鎌黒遺跡は志賀郡志賀町南比良に所在する。比良山系を形成する一つの山塊・堂満岳から琵琶湖方面に伸びる尾根稜線状に位置する遺跡で、凡そ、標高180~200m付近に該当する。かつての分布調査時に、扁平片刃石斧が炭層の中から採集されており、その立地条件から弥生時代中期の高地性集落の存在とともに、あるいは、製鉄関連遺跡が重複している可能性も想定されていた。

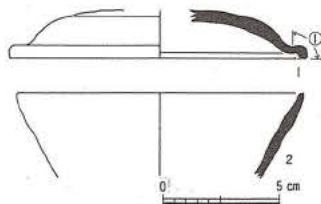


第1図 鎌黒遺跡の位置(S=1/50,000)

さて、こうした鎌黒遺跡であるが、付近を国道161号線志賀バイパスが通過することとなり、その事前調査が平成8年12月から平成9年3月にかけて実施された。今回の調査の対象地は、かつて炭層が確認された地点の東側に当たり、調査の結果、遺構・遺物はまったく確認されなかった。すなわち、今回の調査対象地までは遺跡が広がっていない事実が確認された訳である。しかし、試掘調査に先立つ現地確認の時点において、3点の須恵器片が採集されており、近辺に須恵器を出土する年代の遺跡が存在する可能性が伺われるところとなった。

比良山系の東斜面には多くの遺跡が存在している。しかし、その大部分は年代等の詳細が明らかにされおらず、遺跡群の性格を解明するには、まだ多くの問

題が残されているのが現状であった。しかし、今回採集された須恵器によって、その遺跡群の年代の一端を推定する手掛かりが得られた。その意義は少なくないと考えられ、試掘調査担当者の重田勉氏のご厚意により、その須恵器資料の紹介を行うとともに、比良山系の遺跡群の意義について、若干の推論を行うものとした。



第2図 採集の須恵器実測図

### 須恵器資料について

須恵器は3点採取されているが、図化できたのは2点である。

1は杯Bの蓋である。笠形の天井部から逆「て」字状に屈曲する口縁部が取り付けタイプであり、口径12.5cm、器高2.0cm以上を測る。やや大粒の石英粒を若干量と、微細な長石粒と黒色粒(酸化鉄)を比較的多く含む胎土で、堅緻に焼成する。色調は、表面暗青灰色であるが、断面は紫灰色を呈する。内面は丁寧なナデで仕上げるが、外面天井部は雑なナデを施す程度である。また、外面口縁端部(①範囲)のみに黒褐色の発色する自然釉が観察でき、正位・垂直の重ね焼きが復元できる。

2は小破片であるが、杯Aと推定される。口径12.2cm、器高3.7cm以上を測り、図化した部分から屈曲し、底部に連続するものと考えられる。微細なチャート粒と長石粒を若干量含む胎土で、やや軟質に焼成する。色調は、淡青灰色を基本とするが、口唇部のみが灰黒色を呈する。重ね焼きの影響と考えられる。内外面ともに、丁寧なナデで仕上げる。

なお、図化できなかった破片は、杯B蓋の天井部と考えられる細片である。色調は青灰色で、胎土は1の杯B蓋にほぼ共通する。

### 遺跡の年代と性格について

さて、以上の3点の須恵器の類例は、平安京右京三



糸三坊五町S D19に求めることが可能であり、9世紀前半でも中葉に近い年代が与えられる。<sup>⑩</sup>すなわち、年代的にはまとまりのある資料と言い得るだろう。一方、肉眼観察による限りでは、胎土は2者に分けることが可能であり、異なる生産地から搬入されたものと言うことができるだろう。

こうした特徴の須恵器資料を出土する遺跡としては、遺跡の立地を加味すれば、墓地関係と生産遺跡関係の2者に限定することが可能かと考えられる。

さらに、墓地関係について考えれば、琵琶湖を一望にする立地と比良山系の信仰性を考えれば、俄然性の高いものである。しかし、多賀町梨木古墳のように、唾壺や薬壺などの比較的優品を蔵骨器に利用することが多いようである。この意味からすれば、通常の杯・蓋を用いている当該例はやや趣を異にしていると言い得るだろう。

一方、生産遺跡関係では、立地条件から、製鉄関係、特に炭窯の可能性が考えられる。滋賀県内においては幾つかの製鉄遺跡の調査が実施されている。それらによれば、須恵器形式で1形式かせいぜい2形式程度の時間幅の間で操業し、異なる地点に移動すると言う特徴が指摘できそうである。さらに、特殊な場合を除いて、土器類が伴う場合も少量で、特に炭窯などではほとんど土器類が伴わないのが一般的な様相である。まさにこれらの特徴は、今回採集された須恵器片の特徴や試掘調査の結果と整合するものと認識できるのである。

以上、鎌黒遺跡の近辺には、9世紀前半代の製鉄遺跡、特にそれに関係する炭窯が存在する可能性が高いものと考えられた。あるいはその一つの候補として、かつての分布調査で確認できた炭層付近が該当する可能性も考えられるだろう。

#### 比良山系の製鉄遺跡

現在志賀町内の比良山麓部には14箇所の製鉄遺跡が知られており、<sup>⑪</sup>この鎌黒遺跡を加えれば15箇所となる。ただし、鎌黒遺跡の所存する谷奥には天神山金糞峠入り口遺跡が知られており、あるいは、これと一体の遺跡と考えることも不可能ではないであろう。

いずれにしろ、これらの製鉄遺跡は、比良山系に形成された谷筋毎にほぼ等間隔に分布すると言う特徴が指摘できる。また、一つの谷筋（一つの遺跡）には、一個所のみ鉄滓分布が認められるようであり、1遺跡、1炉と言う形態の遺跡群が点在しているものと考えられる。なお、幾つかの遺跡においては木炭資料の放射性炭素による年代測定が実施されているが、相対的に古い年代が示されているようである。

こうした遺跡の在り方から、丸山竜平氏は炉操業による森林荒廃＝自然破壊を避けるために、奈良時代から平安時代を一つの定点に、順次移動しつつ操業を

行ったものと推論されている。<sup>⑫</sup>この、奈良時代から平安時代を一つの定点とする根拠は、山田地蔵谷遺跡において9世紀代の須恵器が採取されていると言う事実と拠るものである。

しかし、今回の鎌黒遺跡の須恵器資料によって、天神山金糞峠入り口遺跡を含めた鎌黒遺跡の付近においても、9世紀前半頃に製鉄遺跡（木炭窯）が営まれている可能性が指摘できた。これは、現時点までにおける一つの定点である、山田地蔵谷遺跡の年代観とほぼ同時期であり、少なくとも、この二つの遺跡に関しては、同時代的であり、順次移動しつつ操業したものであると言う考え方に見直しを求める結果と言い得るだろう。すなわち、比良山系の製鉄遺跡に関しては、同時期に2個所以上で操業した可能性が考えられるのである。そして、この可能性に従えば、比良山系に所存する製鉄遺跡群は、比較的長期に渡って、順次操業されたものではなく、短期間の内に集中的に操業されたものとも考えることもできるのである。

滋賀県の製鉄遺跡は、畿内に最も近い製鉄地帯として、中央政府との密接な関係に置かれていたと考えられている。近江国庁などの官衙群を控えた瀬田丘陵遺跡群や文献で知られる高島・浅井の製鉄遺跡群などである。これらの遺跡群においては集中的に製鉄が行われていたと考えられる。今、比良山麓遺跡群についても、短期間・集中的操業を考えるとすれば、ここにおいても政治的な色彩を見出すことが可能になる。すなわち、体制的に管理された生産活動であるがゆえに、集中的な生産を行い得たのである。

また、現状では瀬田丘陵の製鉄遺跡群は8世紀代に操業のピークが存在するようであるが、比良山麓遺跡群では9世紀前半の時点において、操業している事実が考えられた。すなわち、両者の間には年代的な差異が存在する可能性も考えられ、これは、滋賀県の製鉄遺跡の変遷を考える上で大きな意味を持つものである点と言うまでもないだろう。

現状では、いずれも推論の域を脱するものではないが、今回紹介した須恵器資料は、このように比良山麓製鉄遺跡群に関して、重要な問題を提起するものである点は確かである。今後、具体的な製鉄遺跡の調査・研究を進める中で、これらの問題が解決されるであろう点を確認して、結びとしておきたい。

（細川 修平）

#### 註

- ①古代の土器研究会編「古代の土器1 都城の土器集成」1992年による
- ②丸山竜平 小熊秀明「鉄と須恵器の生産」『志賀町史』第1巻 1996
- ③註②と同じ。



## 265. 虎御前山遺跡出土の石器

～北山古墳の調査に際して～

はじめに

本稿は、平成8年度(仮)虎御前山教育キャンプ場整備事業に伴う試掘調査時に確認された、石器資料の紹介である。実測図については正報告でも紹介しているが、周辺の状況等については、紙幅の都合上触れていない。そこで、本紙面において、本資料から考えられる種々の状況について、若干の検討を加えてみたい。

### 本資料出土地点の概要(図1・2・3)

虎御前山遺跡は、東浅井郡虎姫町に位置し、これまで虎御前山城遺跡あるいは八相山城遺跡として、織豊期の小谷城攻めに際する城郭跡が知られ、また一帯では(時期は定かではないが)古墳群もこれまでに多数確認されていた遺跡である。

今回紹介する石器は、その古墳群の内の一つ、地元では通称北山古墳と呼ばれている古墳の墳丘調査のために設定した調査区(第19トレンチ)内において検出された資料である。図3に示す通り、花崗岩バイランドが土壌化した土層(第7層)中から出土している。古墳築造、あるいは中世城郭築城、さらには最近にな

ってキャンプ場用に造成していることもあり、厳密には分からないが、土層で確認する限り第7層は古墳築造前後には既に堆積していた土層であると判断しうる。おそらくある程度は原位置を保っているか、もしくは古墳築造時に堆積した土壌中に含まれていたであろう。

### 出土石器について(図4)

本石器は、サヌカイト製のいわゆる翼状剥片、すなわち瀬戸内技法第2工程で作られられる剥片として理解しうる資料である。

背面下半の剥離面は、いわゆる盤状剥片石核の主要剥離面として判断されるポジ面の一部で、通常“底面”として理解されうる剥離面である。打面は、背面側からの出面調整により整形・調整されている。瀬戸内技法の第2工程で確認される、いわゆる山形調整およびそれに付随した打面縁調整に相当する工程をイメージできよう。また背面の剥離痕の状況から、本資料獲得以前に同様の類似する剥片が獲得されたことが予想される。背面右側面は、上面側からの加圧により折損している。

なお、背面下端に微細剥離痕が認められる。この微細剥離痕については、厳密に使用痕であるかどうかは



第1図 遺跡位置及び周辺地形図



不明である。

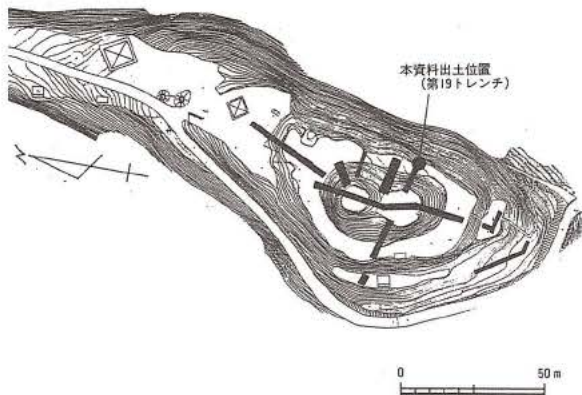
### 遺跡の立地について

滋賀県における瀬戸内技法に関連する資料の出土例としては、堂谷遺跡をはじめとする瀬田川流域や、瀬田丘陵から布引丘陵にかけてのいわゆる洪積丘陵とその周辺に形成される扇状地やその下流域の沖積層において確認された資料にほぼ限られているような印象をもつ。扇状地あるいはその下流域の沖積層は、丘陵部の堆積を削って再堆積したものと判断すれば、本来は丘陵上に存在していたものの一部なのであろう。

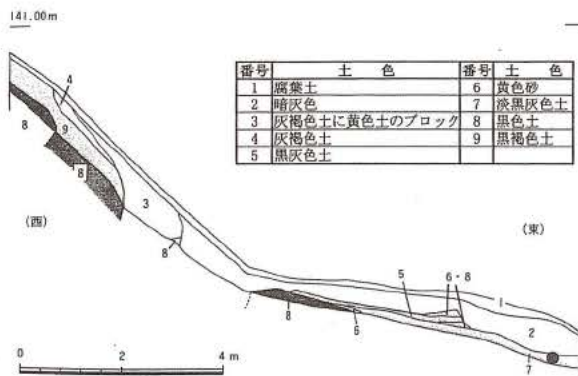
今回出土した地点は、いわゆる独立山塊として一般に確認される地形に位置し、この地形自体は原地形から判断するに、高時川、姉川、草野川の浸食によって形成されたものと思われる。出土地点は、独立山塊の南斜面にあり、平坦面ではないものの比較的なだらかな緩斜面において確認されている。未発表資料ではあるが、岐阜県揖斐郡の揖斐川流域においても、土壌化した始良丹沢火山灰に前後する層で、チャートを主体とする石器群が、丘陵のほとんど平坦面の形成されていない稜線上に石製遺物集中部を形成して、存在することが確認されている。遺跡の規模等については、揖斐川の例を参考にすれば、決して大きくはないであろうが、このような立地条件のもとで、どのような生業活動の一部が為されていたのかについては、非常に興味深いものがある。

### 終わりに

当該期の資料としては、湖北地域では筆者の知る限り初出例ではないかと思う。遺跡の立地についても、これまであまり注意を払われなかった地形に位置して



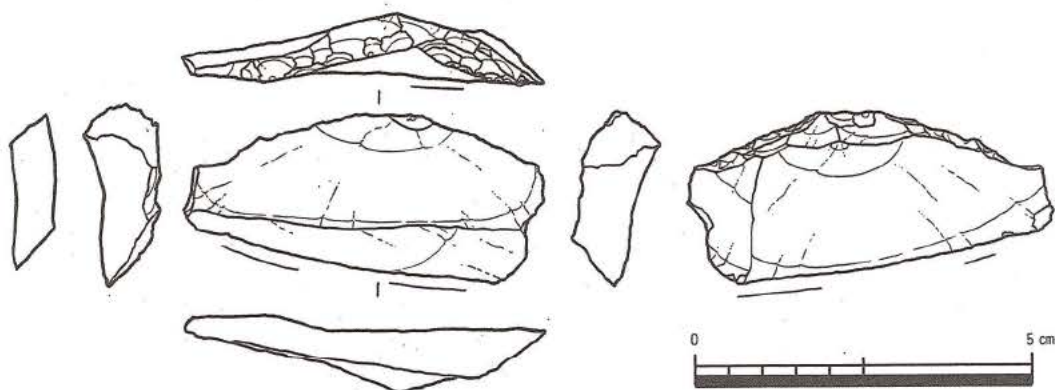
第2図 当該調査区位置図(●印は石器出土位置)



第3図 当該調査区土層断面図(●印は石器出土位置)

いる。今後丘陵上の平坦面にこだわらず、独立山塊やいわゆる山地についても十分注意を払いたい。

(鈴木 康二)



第4図 出土石器実測図